

えぬぴおん 第11号

2004年8月25日

特集

えぬぴおん 休刊宣言！

～市民活動を追いかけて2年～

北海道のNPO総合情報誌としてスタートして2年。
ボランティア編集スタッフ一人一人が市民の視点で、
NPOの現場とつながりながら創ってきた「えぬぴおん」は
新しい旅立ちにむけ、その幕を閉じることになりました。

社会にとっての本当の豊かさって何だろう。
NPOや市民活動に生きる人たちに触れるたび、
手をつなぎ、支え合う社会の必要と、
ともに社会で暮らす人々への深い愛情を感じずにはられません。

ゼロから生み出すエネルギーに向けて
手探りで創り続けてきた私たちも
もう一度、ゼロから歩み出す大切さにチャレンジします。

ありがとう、みなさん、そしてこれからもよろしく！

出会い、学び、そして結ぶ ～NPO、そのココロ～

えぬびおん編集長 斎藤克恵

NPO を知っていますか？

北海道の NPO 総合情報誌の看板を掲げて、私たち編集工房 NODE は 2002 年夏「えぬびおん」の編集をスタートさせた。

前身の北海道の市民活動を応援する雑誌「NODE」を休刊し、そのネットワークと経験を生かしての編集をと、北海道 NPO サポートセンターに委託されたものである。

えぬびおんの「おん」は NPO に息づく人たちの情熱と体温、ワイワイにぎやかに集う（声）、そしてオピニオン（市民の意見が反映されること）の意味を込めた。

NPO 法施行から 1 年半。「NPO」という言葉がやっと新聞紙上でも目にとまるようになった頃。しかし、実際に NPO とは何ぞや、その存在意味と価値をちゃんと知る一般市民は少なかったと思う。私たち編集スタッフもまた一市民として NPO とは何か…実際に現場に学びながら創る手探りの編集作業が始まった。

市民活動は少数派？

「えぬびおん」は書店で山積されている一般誌と同居する、「NPO」というきわめて特殊な情報誌。

ターゲットは誰？創刊当時から何度も議題に上がっていたことだ。一般？それとも NPO の人たち？編集部内でも「こういうのって誰が読むの？」「誰買うの？」と、疑心暗鬼な声があがっていた。

知人にも「市民活動？えらいね。少数派でしょ。生活大丈夫？」と心配される始末。されど！

今までになかったものに着手するには、苦労と努力、逆境に笑顔する強さが必要。それこそ NPO。今までなかったものを浸透させるには時間がかかるもの。私たちは非職業的、市民が発信する市民によるメディアであることに臆してはいけないと。

福祉は現場。NPO も現場。働く人の汗と涙、情熱も現場ありき。その現場の姿をたくさん見よう。そしてわかりやすい文章で表現して市民に伝えよう。現場でたくさんエネルギーをもらったなら、次はつなぐ人、伝える人になるように。

そして編集スタッフ自身も出会う人の「知恵やぬくもり」をきちんと感じられる人になりたいと…。

市民自身が生きる力を

市民のニーズを探り、市民自ら創り、実践し、改善していこう。行政に頼らない、企業にもない知恵と行動力をもった社会貢献をしていこう。NPO が目指すものは「市民自身が自

発的に生きる力」をつけることでもあると感じる。

市民のたった一人のつぶやきでも、NPO なら形にできる。あきらめていたその夢、その願い、捨ててはいけない。

NPO を始めたいという人の声を聞く。近所の一人暮らしのお年よりの「困った」の一声からボランティア活動が始まり、しだいに人の輪が生まれ、地域に広がり大変喜ばれた。このネットワークを生かしたい。すばらしいと思う。

北海道は広い。都市部では民間でも行政でも、様々なニーズや不自由をサポートする社会サービスはたくさんある。一方、過疎化、高齢化が進んでいるところでは、担い手が少なく社会的サービスも行き届かない。

今ないサービスを自分たちで生み出すことは大変でも、喜んでくれる人がいる。町の悩みが解決する。その町は笑顔が広がる心豊かな町に変わっていきだろう。笑顔が日本中に伝染してほしいと思う。

NPO、そのココロは？

起業の取材を進めた際に、「企業だって、繁栄すれば、雇用は増えるし、町の経済基盤も支え、町内会に彩りを加えたり、いろんな催しに協賛するなど社会貢献している、NPO はわからん」と苦言を述べられた。確かに貢献する会社もあるが、基本的には企業は利益の追求が本意。所属する社員個人の資質が社会貢献に根ざしているとは限らない。

良い仕事をして、収入を得て生活を立てる。よい車にのる、家を買う、海外旅行をする、子どもの学費のために頑張る。個人の暮らしの豊かさは、ずっと金や物ありきの物的豊かさが占めてきた。そしてその弊害は、人と人とのふれあいの大切さ、助け合う喜びを忘れてしまったことだろうか。

NPO や市民活動が活発になるということは、逆説からして、人間のコミュニケーション能力、精神生活が貧困になったということではないのか。

なぜ、誰かのため・社会のためは「窮屈」なのか？「甲斐がない」「損する」と感じるのか？時間とお金と暇があるからやるの？なんらかの代償がないとやりたくないの？

本当の豊かさってなに？新しい価値観って？NPO の本質、根源にあるものを問い直したい。

量から質の時代へ

2004 年 6 月現在、北海道の NPO 法人の数は 656 団体。たくさんの社会サービスの種がまかれることはうれしいこと。しかし、これからは数ではなく、質を高める時代に入っていくだろうと感じている。

「えぬびおん」の編集に関わって丸 2 年。たくさんの NPO・市民活動の方々にお世話になった。多くの経験と示唆を与えてくださったみなさまに深い感謝と御礼の気持ちを述べたい。

いま私たちはこの11号をもって、「えぬびおん」を休刊し、次への新しいステップのために、準備を進めている。市民の視点で社会を見つめ、表現媒体をもちながら活動していくこと、そのために私たち自身が成長をしなくてはいけない。

多くの人に浸透し、必要とされ愛される情報誌を目指し、今一度、ゼロ地点へ。失うことの寂しさではなく、また、始まることの喜びを信じて！

えぬびおんに関わって
編集員のひとことふたことメッセージ。

2年間、あつというまだったろうか。
試行錯誤しながらボランティアで編集しつづけてきた私達。
これからかも、というときにえぬびおんの幕引きに立ち会うことになってしまった。
せめて、私達編集員の最後のつぶやき、きいてくださいな。

ボランティアの入り口

汲田 佳奈

何かボランティアをしたいとずっと思っていた。しかし、経験も知識もない。知り合いもきっかけもない。ボラナビを見ては、あれこれと迷い、勇気もないことを思い知った。

ボランティアの「入り口」になるようなボランティアはないかと思い始めたとき、えぬびおんの編集ボランティア募集を見つけた。まったくの初心者だったが、さまざまなボランティア団体の話を聞く事で、何かきっかけがつかめるのではないかと思い応募した。

そこにはなかなかアツイ世界があった。ボランティア特有と思える問題もあった。自分にはない情熱を持っている人が、たくさんいることに驚いた。ボランティアの何たるかはまだわかっていないが、楽しい「入り口」となった。

えぬびおんの編集を振り返って

棟方 悦子

私は、本もNPOの実働も知らない者でしたが、編集に興味があって4号からの参加でした。自分の書いた文が本になるという事に、不安とおもしろさが同居していました。取材であれ映画の紹介であれ、見聞きしたものを文にした時、読者が判りやすく理解できるように、又語られる思いや夢、情熱を温度差を変えないで伝えられたらという思いでした。それには、取材先の人の思いに共感するという心が必要でした。共感する事でさらに人は心を開いて語ってくれる事も感じました。

また、書く作業は、植木のように心に植わり、感動した事が心の中で生き続けるという体験もしています。何より、NPOの様々な発想と働きを知る機会となり、貴重な時間でした。

ありがとう、えぬびおん

木皿 玄造

「えぬびおん」ありがとう。右も左もわからず僕がNODEに入ったのは10号の編集からだ。この短い間にどれだけのことが学べたのだろうか？数え切れないほど多くのことを学べたと思う。僕の取材文が初めて本に載った時とても嬉しかった。そして、人に思いを伝えることの大変さを初めて知った。NODEでは高校生の僕が一番年下でみなさんに迷惑を

かけないか心配だった。迷惑をかけたと思う。だけど貴重な経験になったと思う。ボランティア活動に参加する、NPO に関わるきっかけになった「えぬびおん」ありがとう。これからは違う形で NODE の活動に参加することを望みながら、また新たなことに挑戦していきたい。

また会う日まで…

山下 千尋

えぬびおんの前身である「NODE」から関わり始めて早 4 年。4 年と言えば大学を卒業してしまう月日ですね。

私自身の関わりは月日が経つに連れてだんだんと浅くなっていきました。それでも「NODE」そして「えぬびおん」にはそれぞれの魅力を感じていました。

雑誌という形で原稿を世に出す（販売する）ということは、大きな事業です。しかし、事業を運営する団体や、NPO が事業をする理由であるミッションをしっかりと振り返ることがうまくできなかったような気がします。これは編集工房 NODE についてだけれど、私の現状についても似たようなことが言えるかも知れません。

さて、反省はこのくらいにして。今後の NODE と私自身は、どういうミッションを掲げ、どのように達成していくのか？は、これからの楽しみに！またお会いする日まで。

休刊にむけて

富塚 廣

高度経済成長が地域破壊、地域崩壊の過程だとしたら、これからは地域再生、地域創造の時代だと言える。もちろん、その主役は NPO だ。今年度の国民生活白書ですら、「“官”の提供する住民サービスは個人の多様なニーズに対応しきれていない」との認識を示し、それに代わる新たな「公共」の担い手として NPO に期待している。その表題は「人のつながりが変える暮らしと地域——新しい『公共』への道」という魅力的なものだ。そういう時代を迎えているのに、「えぬびおん」を休刊せざるをえないのは残念だが、私たちの持続する意思はこれからも新たな表現媒体で自分たちが地域をつくる時代に向かっての挑戦を続けていく。再見！

編集の醍醐味

加藤 敬義

昨年 2 月より、編集に関わってきました。強烈な個性との出会い、そして、インスピレーションを受け続けた 1 年半。その人や団体の魅力を上手く誌面で伝えるには、どうすればよいか…この点を練り上げていく過程は、思案をめぐらし悩める時——頭の中でパズルを組み立てるかのよう——であると同時に、この過程自体に喜びを見出していく時でもありました。編集に携われる者だからこそ、まさに醍醐味であったと思います。NPO、並び

に市民活動の風を身近に感じられる機会は、間違いなく貴重なものでありました。えぬぴおんを通じた、あらゆる出会いに感謝！

ご愛読して頂いた皆様、ありがとうございました。

えぬぴおんに関わって

ユメオ

自分にとって、えぬぴおんとの関わりは、単に雑誌を作るという感覚ではなく、自分のライフワークでもある「子ども」というテーマに基づいた取材を中心に展開していたように思う。いじめや非行、虐待、不登校、軽度発達障害、子どもの文化、遊び、ボランティアなど広い視点からNPOと絡めて子どもを追っていた。こんな殺伐とした世の中でも、子どもの夢を育み、未来へつなげようとする人たちもたくさんいることを知っている。そんな個々の思いをひとつにネットワークしていったならと思っている。子ども達の心がケアされていくことが、明るい社会をつくることにもつながると考える。今後も何らかの形で伝えていきたい。

NPO の現場から

えぬびおん休刊にむけてのメッセージ。

発刊以来、忙しい時間をさいて、取材に応じ、
寄稿して下さった多くの方々の存在なしにえぬびおんは語れない。
NPO の現場に関わる彼らからの優しくも
ちょっとピリカラ (?) メッセージに耳をかたむけたい。

これからもいっしょにがんばっていきましょうよ

「飛んでけ! 車いす」の会 代表 下村 朋史

私が「えぬびおん」に期待し、自分自身、文章を書く上で意識していたことは、「一部の人のものにならないように」ということです。その道に詳しい人にしかわからないような言葉が並んでいても、興味を持たない、何も感じられないのではと思っています。よりたくさんの方の目を向けてもらいたいからこそ、雑誌という媒体に意味・価値があるのかと思います。

私はたまたま「飛んでけ! 車いす」の会の代表をしていただけで、ありふれたごくごく普通の人間です。そんな私が連載を持って、下手なイラストも書かせてもらえるなんて、こんなありがたいことはないです。

特別ではない普通の方が、ちょっと変わったことをやっていて、そのことが見知らぬ誰かの目に触れ、ほんの少しでも共感できた、心動かされた、なんてことがあれば本当にうれしいですね。人間と人間、人間と自然との関係が問われている現代だからこそ、それらをつなぐ媒体としての「えぬびおん」に結構期待していました。形は変わるかもしれませんが、今後もできるかぎり協力したい、なんて思ったりするわけです。

がんばれ! えぬびおん

NPO 法人ねおす 代表 高木 晴光

ここ1年間の我身のNPO回りを振り返ると、NPO業界(?)そのものが、大きく変化しつつあるように感じている。というよりも変化してしまったのかもしれない。NPOという道具箱が作られ活発に使われるようになればなるほど、道具箱を新しく作り、使う人達、組織が増えてくる。協働型・お互いに支えあう社会づくりにとっては、とても結構なことなのだが、ややもすると、NPOの存在の原理原則が経済原理の影に隠されてしまいそうになっている。では、その存在原理(アイデンティティ)とは何か・・・、それを新生えぬびおんでは、分かりやすく特集して欲しい。生き方・暮らし方、ライフスタイルの転換をリードする媒体として。

一歩先ゆく市民活動の情報を

NPO 法人エーピーアイ・ジャパン 代表 瀧谷 和隆

これまで、質の高い市民活動情報を提供していただいたことを心より感謝します。今回、「えぬびおん」が休刊になるとお聞きし、このような情報紙がなくなることに、このような活動をコツコツしてきたスタッフの方々が、市民活動の報道の現場から離れなくてはならなくなることを大変残念に思います。「えぬびおん」の内容が今の時代より少し先を行き過ぎていたのでしょうか？でも、何時の日か、必ず、「あの時代に、このような内容の市民活動誌があったんだ」と評価してくれる多くの市民が現れると確信しています。

これからも、NODE の組織体制が変わっても、一歩先行く市民活動の情報提供集団として、活躍されることを心より祈念しています。

明日への登山者として

NPO 法人在宅生活支援サービスホーム花凧（はななぎ） 木村 優

山がある。登山口はいろいろある。それぞれ登る道も登り方も違う。が、たどりつく頂上は一つ、見る景色は同じ。今、NPO、活動団体、ボランティアグループ…。多くの人々が明日を開くための山を登りだしている。明日への登山者を追った「えぬびおん」もまた明日への登山者の一員でした。貴誌が休刊とは残念。毎号、とても参考になり、かつ励まされました。二年の奮闘にただただ拍手するのみです。新たな旅立ちへ新誌を出すと聞き、安心。奮闘再びにただただ声援を送るのみです。これまでを踏まえるだろうから、ただただ期待あるのみです。新誌にあえて注文をつけるなら、一人でも何かしている人、頑張っている人も扱ってはどうか。彼らもまた登山者の一員。そんな内容の拡大はより多くの人を山へ誘うと思うのです。

えぬびおん休刊に向けて

北海道 NPO サポートセンター 小林 董信

全国初の NPO 総合雑誌を北海道発で創ろう！と意気込んで 2 年前編集工房 NODE のみなさんと話し合ってから 2 年が経ちました。1000 部の販売と一定量の広告出稿を見込んでのスタートでした。隔月刊で 10 号発行したところで糧食尽きて発行断念、11 号以降のことは編集工房 NODE に「大政奉還」することになりました。

この間定期購読して発行を支えてくださった愛読者のみなさん。申し訳ございません。その前数年間の NODE のデータと合わせ、2002 年～2 年間 10 号分のデータは貴重な財産です。これからの北海道の市民活動発信媒体として何らかの形での発行継続を編集工房 NODE が検討されているとのこと。期待しています。

新たな旅立ちに向けて

NPO 法人札幌チャレンジド 共同代表 加納 尚明

えぬびおん休刊の知らせを聞いたとき、真っ先に頭をよぎったのが「コミュニティビジネ

スの落とし穴」である。NPO の営むコミュニティビジネスの多くがその採算性に悩んでいる。えぬびおんもまた、その採算性を大きな理由として休刊を余儀なくされた。

えぬびおんが新たな旅立ちに向けてこれから多くの議論が行われるであろう。その議論の中でぜひ、「誰にお金を払ってもらって読んでもらう雑誌を創るのか?」「そのターゲット層に向けてどんな方法でPR活動(営業活動)を行うのか?」の2点をじっくりと議論してほしい。言い換えれば、「マーケットリサーチと販売戦略を徹底する」ということである。それが実現したとき、新しいえぬびおんは、多くの読者を魅了し続けるであろう。

編集工房

新しい「市民活動情報誌」の創造にむけて

NODEの今後を考える

編集工房 NODE は、1997年に市民活動応援マガジン「NODE」(全24号、休刊中)を出版して以来、およそ7年半の間、市民活動やNPOの活性化を目的にした、活字媒体の制作を行ってきました。このたび、残念ながら「えぬびおん」は休刊することになりましたが、現在若手メンバーを中心に、新しい「市民活動情報誌」の制作を模索しているところです。そこで、有識者のみなさま3名に、新しい「市民活動情報誌」を制作するにあたって、いろいろアドバイスをいただきました。

取材・文 滝口 一臣

NPOは新しい生き方になりえるか

サラリーマンになって、いくら報酬をもらい、生活費を払って、残った金で、車、服、CD、本なんかを買ったり、趣味に没頭したりする生活は続かなかった。会社で「仕事を楽しむ」ことができなかつた。社会からの評価(仕事、勉強など)は常に低かつた。この国で生きるのは無理だと思っていた。

そんなガキみたいなことを考えて、ふらふらしていた2002年下旬。僕は、ひょんなことから「えぬびおん」編集長の佐藤克恵さんに出会い、翌年のはじめから、ボランティアとして「えぬびおん」の制作に参加している。参加目的は、NPOに今とは違う、新しい生き方を見出したかったから。以来、様々なNPOのみなさんに、取材と称してお話を聞かせてもらってきた。そして現在はあるNPO法人で、1ヶ月に7万5千円をもらって「活動」している。

友人や親戚は、給料が低い「仕事」に批判的だ。ましてや、ボランティアで雑誌を作っているなんて口外しようものなら、「いい年して、金ももらえないのにアホか」とくる。僕は、「えぬびおん」の取材や、職場の「活動」から、世の中にとってNPOがいかに素晴らしいか、いかに大切かをいくらでも説明することができる。しかし、最近は説明することを放棄している。なぜなら、「金ももらえないのに…」との批判は、ある程度有効だと認めざるを得ないからだ。NPOが世の中に必要なら、「彼ら」の評価基準である金が、いくばくか(従業員の1人や2人を養うぐらい)稼げてもおかしくはない。

「彼ら」からすると、NPOはただの趣味でしかない。「NPOなんか、暇なやつがやるものだろ。早くやめて、まっとうに働け」と、市役所に勤務する知人は言った。NPOが今とは違う、新しい生き方になるとしたら、やはり職業、生業として「彼ら」から認識されるようであればならないと近頃感じる。そのためには、NPOの重要性や社会に与えるインパクトを大勢の「彼ら」に知らせ、NPOへのニーズを作っていかなければならない。

これから作る「市民活動情報誌」は、「彼ら」のように、市民活動やNPOに興味、関心がない人、または存在すら知らない人に読ませたい。読ませるように作らなければならないと思っている。NPOを新しい生き方の一つにするための挑戦として取り組みたい。

自分たちが住んでいる場所から、文化を作っていく視点、気持ちをもってほしい。北海道の地域性が見える雑誌を作ってほしい。

「インパクション」編集委員／出版社コモンズ北海道販売担当 越田 清和

個人の思いを結集して、新しい価値を創造する

まずは、「えぬびおん」の休刊を徹底的に検証してみたい。そこで、「えぬびおん」の愛読者で、「インパクション」編集委員／出版社コモンズ北海道販売担当の越田清和さんに、あえて辛らつなご意見をお願いしてみた。

『えぬびおん』は、中身から『ここが素晴らしい』とか『ここが未来に繋がっている』という視点が見えにくい。『NODE』には市民運動の視点があったのが、『えぬびおん』からは作り手の視点というか、思いが見えにくくなっているように感じます。NPO 団体を紹介することだけにとらわれすぎていたんじゃないですか？」

「あらたに雑誌の制作をはじめるのであれば、自分たちが住んでいる場所から、文化を作っていく視点、気持ちをもってほしいです。道内には良い書き手が大勢いるはずなんで、そういう人を発掘して、毎回書いてもらうなどの工夫がほしい。北海道の地域性が見える雑誌を作ってほしいです。あとは、1冊ごとに自前の主張を作り、明確に伝えていくことも大切です。雑誌は、多少の危険さや乱暴さがないとおもしろくないですから」

NPO 団体を紹介すること自体は意義があると思う。しかし、新しい価値を提示しようとする意識が、編集方針の中に希薄であったと思う。「市民活動情報誌」では、編集方針の中に、メンバー一人一人がもっている熱い思いを落とし込んで、雑誌全体として、チーム全体として新しい価値を創造し、提示していきたい。

公共放送には一定のクオリティが求められますし、ミッションを共有していないと、いっしょに活動することは難しいんです。

NPO 法人さっぽろ村コミュニティ工房理事 加藤 知美

市民参加型 NPO を運営するには

「えぬびおん」の制作は、ボランティアを公募するかたちで行なわれてきた。「市民活動情報誌」も、ボランティア参加型で制作していきたい。しかし、ボランティアとの仕事の分担は、なかなか難しいという実感もある。そこで、ボランティア（放送サポーター）約 250 名が活動するコミュニティ FM 放送局を運営している、NPO 法人さっぽろ村コミュニティ工房（以下、さっぽろ村）理事の加藤知美さんに、参加型 NPO を運営するコツを聞いてみ

た。

「ラジオのボランティアを希望する人は、様々な目的をもってやってくるんです。プロのDJになりたい人、地域の情報を発信したい人、自分の居場所を探している人。全ての欲求に、100%こたえられるわけではありませんが、できるだけ対応していこうと思っています。そして、活動してもらうことになったら、複数人でチームを作ってローテーションを組むなど、各自の都合（社会人の繁忙期、学生の試験期間）に合わせて無理なく参加できるようにコーディネートしていきます」

「また、ボランティア希望の人には必ず、さっぽろ村主催の番組制作セミナーを受けていただきます。セミナーでは、コミュニティ放送の目的、放送法、制作技術など学んでもらいます。そして、さっぽろ村が掲げている東区のまちづくりという目的（ミッション）を共有してもらうようにしています。口うるさく指導しますので、嫌になってボランティアを諦める人もいます。でも、公共放送には一定のクオリティが求められますし、ミッションを共有していないと、いっしょに活動することは難しいんです」

団体は、ボランティアの自己実現をできるだけ支援したり、活動しやすい環境を作る。そのうえで、活動に参加するときのルールを守ってもらったり、団体のミッションを共有してもらうように努める。参加型 NPO には必須の条件なのだろう。「市民活動情報誌」を制作するにあたり、意識して取り組みたいことである。

コミュニティペーパーの発行主体にありがちな稚気を捨てて、大人の出版、大人の流通を一度考えてみる必要がある。

北海学園大学助教授／NPO 法人北海道 NPO バンク理事 樽見 弘紀

作ることと同じくらいに、売ることにも情熱を

「市民活動情報誌」を、持続可能にするためには、活動資金集めを避けて通るわけにはいかない。やはり、「市民活動情報誌」を発行することで、ある程度のお金を生み出さなければならない。そこで、「市民活動情報誌」の流通方法として、フリーペーパー化（無料化）を検討している。フリーペーパーにすれば、広告収入が見込めて、さらに多くの人に読んでもらえるとの考えからだ。しかし、北海学園大学助教授／NPO 法人北海道 NPO バンク理事の樽見弘紀さんは、このように語る。

「フリーペーパー化には、ちょっと疑問があります。現状では、市民活動情報への一般人（市民活動に携わっていない人）からのニーズは少ないように思われます。ニーズが少なければ無料でも読まれないでしょう。また、無料になると、読むインセンティブが落ちてしまう。とりあえず手に取ってもらっても、多数が読まれずに捨てられてしまっはもったいないでしょう」

「フリーペーパー化実現の可能性が本気で議論されているのなら、たとえば価格を 150～300 円くらいに設定して、本の売り上げは全額、書店の取り分としてはいかがでしょうか。

従来この手の雑誌は、理解ある書店のオーナーさんのご好意によって扱っていただくか置いていただくことが多かった。しかし、売り上げがすべて書店のものになれば、売る努力をしてくれるかもしれない。そして、読者にとっては価格が低いので手にとりやすく、かといって無料ではないので、簡単には捨てない。読むインセンティブが保たれるんじゃないのか。また、こちら側は代金回収の手間ひまや「とりっぱぐれ」が省ける。本を売っていただく書店さんの事情を一度、十分に調査してみてもいいでしょうか？いずれにしても、コミュニティペーパーの発行主体にありがちな稚気を捨てて、大人の出版、大人の流通を一度考えてみる。そのなかで出てきた制約や限界をいわば市民力で補っていく、といったかたちが必要かと思われま

す」
これまでのノードは、作ることに熱心に取り組んできたが、売ることにはあまり努力してこなかったように思う。しかし、「市民活動情報誌」は、作ることと同じくらいに、売ることにも情熱を傾けていきたい。読んでもらわなければ意味が半減するし、読んでもらうには売らなければならないのだから。